

愛の星 Xmas 特別号

2012・クリスマス特別号(通算132号) 2012年12月19日



社会福祉法人 東京聖ビンセンシオ・パウロ会

愛星保育園

〒108-0074 港区高輪1-27-40

TEL.03-3441-5410

FAX.03-3441-5436

E-mail aiseihoikuen@fancy.ocn.ne.jp

http://www.aisei-hoikuen.com



園の花(すみれ)

愛星の聖劇について

愛星保育園

元園長 山田 洋子

この夏、村岡園長先生から「愛星の聖劇の成り立ちについて書いて下さい」とお声をかけていただき、私はあの木造平屋建て、定員五十名の家庭的な子ども達の居場所、旧園舎をとていとおしく思い出していました。二十年程前のことになりますが、法人理事会から子ども達に神さまのお話をするようお話がありました。

私は、早速カリキュラムに子どもの成長にそって情操保育の一端として、聖話(聖書の話)を加えて立案し、先生方に日常保育との調和について説明しました。私は、聖話を単にお話ただけで終らせず「イエス様は、いつも私達と一緒にいて下さり決して一人ぼっちではない」と安心を伝えたいと思ったからです。先ず、子どもの成長過程で、理解力の基本となる「よく見る」「よく聞く」をそれぞれの年令に合せて、保育の中でし

っかりと身につくよう心がけました。

春は、入園、進級の環境の変化で落ちつかなかった子ども達は初夏の頃には友達と遊ぶ楽しさを覚え視野も広がって運動会ではひとまわり大きくなった体に、一人一人が理解力も備わり自分らしさを発揮していました。計画した聖話は、先生方の協力で四・五歳児は合同で、三歳児は生活全体が落ちついた秋から始めたこと記憶しています。

毎年、クリスマス前四週間の準備期間アドベント(待降節)に入ると、週一回イエス様ご誕生までの話、祈り、聖歌の順のプログラムが四週続きその度に灯される一本、一本のローソクの先にクリスマスの期待が広がり、子ども達は自分より小さい赤ちゃんイエス様に親しみを抱き、何かしてあげたい気持ちが自然にわいてきました。赤ちゃんイエス様が喜ぶことは何だろう?「友達に優しくして上げることかな」等考え「給食を残さず食べよう」「ちよっとの我慢」「我儘言ってママを困らせない事」等々子どもらしい発想で、思い思

いの「こころのプレゼント」がひろがっていきました。アドベントと平行して「救い主イエス様ご誕生」の聖劇の準備も始めました。

一般にキリスト教関係の幼

稚園・保育園ではクリ

スマス行事として

イエス様ご誕生

の劇(聖劇)を

演じて祝う習

慣がありま

すが、私の手

元にある僅

かな資料を

拙い経験をも

って先生方へ

「今年の聖劇の

プラン」を次のよ

うに提案しました。



「脚色は、台詞なしでオペレッタ風に。全園児の出演。配役については、小羊たちを乳児組。羊飼いたちは三歳児全員で。宿やさんは四歳児みんなで。中心となる役は五歳児で。」と、この大雑把な説明に先生方は、一瞬戸惑ったようでしたが、何よりも歌の大好きな子ども達の姿をイメージし前向きに受けとめました。五歳児の役決めについては、自分で演じたい役を自主的に選べるようにし、担任には、助言程度の見守の役をすすめました。

例えば、マリア様役を選んだ女兒二人、互いに主張が強く相手にゆずる気配がなく気をもんでいると二、三日して一人が涙を流しながらも晴々した表情で「私は、赤ちゃんイエス様に“ゆずって上げるころ”をプレゼントすることに決めたの」と納得して天使役に代わりました。博士役の場合も、三人と決めつけず、人数がふえたとしても献げ物をちょっと工夫すれば立派な行列の場面になるのではないかと等工夫しました。

早速クラス毎に練習が始まり、その合間にお互い他のクラスの練習をのぞいて見たり、覚えた歌を口ずさんだりしながら、いつの間にか聖劇の全体像をつかみ、全園児出演は無理と思われた不安は吹き飛び、四～五回の合同練習で愛星の聖劇が出来上がりました。

今でも忘れず記憶に残っていることは、この時期風邪や発熱で欠席する子がふえ、祝会当日どうなることか安じていた先生方の心配をよそに五歳女兒のMちゃんは、いつの間にか聖劇の全ストーリーと

歌、振りを完全にマスターしどの役でも代役OKの力強い助っ人になっていました。

いよいよ祝会当日、喜びいっぱいの子ども達は、緊張しながら自信をもって歌い、演じ舞台となった当時の乳児室が広いステージにさえ見えてきました。観客の保護者の方々、職員は一生けんめいに演じる子ども達の清らかな演技に深く感動し、心洗われる思いに包まれていました。

子ども達の達成感に充ちた笑顔、惜しまずに拍手をおくる職員の喜びの表情を見つめながら、私は一人一人の心に赤ちゃんイエス様が訪れ「一人ぼっちではないよ。いつも私はあなた達といっしょだよ」と語りかけて下さったと確信していました。

全園児出演の聖劇について思い出すままに書いてきましたが、振り返ってみると、聖劇は一度で完成したのではなく、子ども達の豊かな感性と先生方の創意工夫の努力が調和し、いくつかの経験を経て仕上ってきたことを付け加えたいと思います。

あの旧園舎から始まった五十人の子ども達と職員の協力で毎年演じられる愛星の素敵な聖劇を思いめぐらすとき日常の保育も含めて、その原点は、法人母体である東京聖ビンセンシオ・ア・パウロ会の子ども達、保護者の方々、全職員を思いやる目には見えない大きな支えがあった事実を忘れてはならないと思います。改めて、愛星保育園とのご縁を深く感謝申し上げ、今後も地域の人々から愛され、必要とされる愛星らしい保育が続きますようお祈りしております。

